

韻の知組字、章組字の区別については、『The Ningpo Syllabary』、『同文備攷』、清代寧波音を反映していると考えられる韻書『古今韻表新編』などの歴史文献でもうかがい知ることができる。『古今韻表新編』は、『罕見韻書叢書』、長城（香港）文化出版社、1995年、所収の排印本を参照。

- 18) 従来、中古音の濁音声母は現在も濁音で発音される特徴を有しているといわれてきたが、地域によっては清音化しているところもある。
- 19) ここで掲げた例字は、表3で掲げた澄母の例外字の中から選出した。
- 20) 3つの変遷模式を挙げたが、吳語全体としてはこの他にもバリエーションがあるが省略する。
- 21) カッコ内は『古今韻表新編』、『The Ningpo Syllabary』の寧波音の段階を示している。紹興・天台・温州がこの舌葉音の段階を経たか否かは不明である。
- 22) 明代の昆山方音の段階を示している。丁鋒2001を参照。

本稿は、平成17年度日本学術振興会特別研究員奨励金による研究成果の一部である。

注

- 1) この鎌倉・江戸の唐音は実質的にはまったく別系統のものである。
- 2) これら禅宗系唐音資料の音韻体系は、いずれも大同小異のものであるといわれている。有坂秀世1939、「諷経の唐音に反映した鎌倉時代の音韻状態」(『国語音韻史の研究』所収)、三省堂、1957年、pp.185-220。
- 3) 奥村三雄「聚分韻略の研究 付古本四種影印・慶長版総索引」、風間書房、1973年。
- 4) 高松政雄「中世的唐音」「日本漢字音論考」、風間書房、1993年、pp.172-192
- 5) 邵栄芬「敦煌俗字学中的別字異文和唐代西北方音」『中国語文』、1964年。羅常培『唐五代西北方音』、史語所単刊甲種12、1933年。高田時雄『敦煌資料による中国語史の研究一九・十世紀の河西方言』、創文社、1988年。
- 6) 中国近代音を代表する元代の韻書。
- 7) ただし、一部、支思韻はいち早く巻舌音化し、齊微韻とは区別されている。
- 8) 現代吳方言における方言区分は、『中国語言地図集』に拠る。中国社会科学院和澳大利亞人文科学院合編 『中国語言地図集』、朗文出版社、1987年、香港。
- 9) 常州や蘇州など一部の地域を除く。詳細は、拙稿平田直子「北部吳語仮撰開口三等章組字的語音演変」『吳語研究』、上海教育出版社、2003年、pp.74-79を参照。
- 10) 『略韻』ではタ行音形のものは2例見られるという。例：様テン（澄母）、慎チン（徹母）。高松政雄「唐音—漢字音史上における「韻略」一」『国語国文』1972年、pp.1-24を参照。
- 11) () 内の語は筆者による加筆。
- 12) ここでdiの発音があることは注目される。
- 13) 『The Ningpo Syllabary』における寧波音の記述は、ラテン字母を採用している。よって、表中寧波bの音声記号は、筆者の書き換えによる。当該書のラテン字母による発音表記を記すと、例字順に、澄母はdзи、dzi、dzi、dzi、dzi、džü。知・徹母はcü、cü、cü、cü、c'ü、c'üとなる。
- 14) 舌面音から舌先音へ変化する過程については後述する。
- 15) 明代の昆山方音を反映しているとされる『同文備攷』では、澄母が破裂音読みするものとして「池」do、「墜」diの音が収録されており、筆者の推測を裏付けるものとして、挙げることができるかもしれない。昆山音は太湖片の蘇滬嘉小片に属する。『同文備攷』については、丁鋒『「同文備攷」音系』、中国書店、2001年を参照。
- 16) ただ、閩南語と湘語・贛語の一部において知組の上古音読み（破裂音）する特徴が存する。
- 17) 宕撰については、拙稿平田直子1997「吳方言における宕撰知組字の音韻変化の特徴について」『北九州大学大学院紀要』11号、pp.107-124、拙稿1997「吳方言における宕撰知組字について」『中国語学』244号、pp.125-141参照。止撰、蟹撰開口祭

【言語資料】

鎌倉唐音資料：

- 小叢林略清規：沼本克明「第4章 宋音・唐音 統合分紐分韻表」『日本漢字音研究』、汲古書院、1997年、pp.548～620。
- 諸回向清規式：奥村三雄「日本漢字音の体系」『訓点語と訓点資料』、訓点語学会、1956年、pp.11～42。
- 金沢文庫本正法眼藏：西崎亨「金沢文庫本『正法眼藏』の唐音」『武庫川国文』46号、1955年、pp.109～122。
- 梵清本正法眼藏：水野弥穂子「梵清本正法眼藏に見える唐音表記について」『駒澤大学文学部研究紀要』26号、1968年、pp.48～72。
- 『聚分韻略』：奥村三雄『聚分韻略の研究 付古本四種影印・慶長版総索引』、風間書房、1973年。

吳方言資料：

- 温州、蘇州：北京大学中国語言文学系『漢語方音字匯』（第二版）、文字改革出版社、1989年。
- 紹興：陶寰「方言」『紹興市志』卷43、浙江人民出版社、1996。
- 松江、杭州：錢乃榮『当代吳語研究』、上海教育出版社、1992年。
- 天台：戴昭銘『天台方言初探』、中国社会科学出版社、2003年。
- 寧波：高志佩・辛創・楊開莹「寧波方言同音字匯」『寧波大學學報』第4卷 第1期、1990年。
- 鄞縣：陳忠敏「鄞縣方言同音字表」『方言』、1990年。
- 開化、常山、玉山：曹志耘・秋谷裕幸・太田斎・趙日新『吳語処衢方言研究』、開篇单刊12、好文出版、2000年。
- 舟山：方松熹『舟山方言研究』、社会科学文献出版社、1993年。
- 寧波 b：P.G.von Möllendorff、*The Ningpo Syllabary*, American Presbyterian Mission Press 1901.

なり、表6にみえる状況と一致することが分かる。すなわち、松江、蘇州では摩擦音で発音されることがほとんどで、破擦音はほとんど現れない。

表7

発音方法\地点	蘇州	松江	杭州	紹興	寧波	天台	温州
dz-, dz-	2	1	55	54	70	84	60
z-, z-	46	31	4	3	4	0	0
その他	0	1	1	2	2	0	0

一方、杭州から温州は逆に、寧波、紹興、杭州に若干摩擦音で発音される字があるが、天台、温州は100パーセント破擦音で現れるなど、全体的に澄母は破擦音で発音されていることが分かる。

中古音からの変遷過程を考慮すると、上表7地点中もっとも南に位置する温州から沿岸沿いに北上するにつれ、澄母は破擦音から摩擦音へと変化していくと推測することができる。ゆえに吳方音における澄母の音価は、中古音を起点とするならば、破裂音>破擦音>摩擦音へと推移したことになり、具体的には以下のようになる⁽²⁰⁾。

模式1 澄母 $d > d$ (開化、常山、玉山)

模式2 澄母 $d > dz > dʒ^{(21)} > dz \cdot dz$ (紹興、寧波、天台、温州)

模式3 澄母 $d > dz > dʒ^{(22)} > dz \cdot dz > z \cdot z$ (蘇州・昆山)

5.まとめ

以上見てきたように、鎌倉唐音が依拠したと考えられる吳方音では、知母と徹母は破擦音化をほぼ完了させ、発音上、章組などの歯音に入っている。しかし、澄母はまだ完全に破擦音化したわけではなく、一部の字においては、いまだ破裂音で発音されていた。つまり、宋末元初頃の浙江北部の方音では、澄母の音価は、破裂音から破擦音へと変化する過渡的段階にあったということである。甬江小片の止摺においては、2.で述べたような経過から、その後も、知・徹母と足並みをそろえた変化過程をたどらず、一段階前の状態を保ち、その変化の差を縮めることなく、今日に至っている。

うわけではなく、知組全体においてこの破裂音は現れているようにみえる。

ただ、表5のような知組と章組が区別される現象については、同省の東北部に分布する甬江小片で宕摶、止摶、蟹摶開口祭韻において見られることから⁽¹⁷⁾、甬江小片ないしは吳方言では、知章組合併は、西北方言やその他の方言と異なつて、遅かったということがいえるのではないだろうか。

4. 北部吳語における澄母の音価変遷

吳方音では、周知のごとく、現在でもなお多くの地域で中古の濁音声母を保存している⁽¹⁸⁾。浙江北部の吳方音に関しても同様に、中古の澄母の濁音は保たれている。ゆえに、知母・徹母・澄母の発音は現代においてもなお三者三様に区別されている。しかし、澄母は濁音を保ってはいるものの、地域によって、破擦音 (dz, dz̪, dʒ) や摩擦音 (z, z̪) で現れるなど、その調音様式は一様ではない。今日では、これが船母、禪母との合流という過程を経て、さらに複雑な様相を呈している。ここでは、中古音から現代までの音韻変遷を推測するために、下表のごとく澄母字の発音を例挙してみた。また、参考までに、北部吳語に属する蘇州音・松江音・天台音と南部吳語からは温州音を掲げた。

表6 吳方音における澄母の発音⁽¹⁹⁾

例字 地点	除	厨 柱	持	塵	長 場	値
蘇州	z̪	z̪	z̪	zən	zaŋ	z̪?
松江	z̪y	z̪y	z̪	zəŋ	z̪e	—
杭州	dzy/dzu	dzy/dzu	dʒ̪	dzən	dzaŋ	dze?
紹興	dzy	住dzy	dʒ̪	dzē	dzaj	dze?
寧波	dzy	住dzy 厨dzy/z̪	dʒ̪/z̪	dziŋ	dziā	dzie?
天台	dzy	dzy	dʒ̪	dziŋ	dziŋ	dzi?
温州	dʒ̪	dʒ̪	dʒ̪	dzaj	dzi	dzei

声母に着目すると、蘇州、松江では、澄母字はすべて摩擦音を有していることが分かる。一方、杭州から温州までの5地点では破擦音で発音されている。これを各地点の同音字表で調査し、各発音の出現数を記すと、表7のとおりと

先に、1.で見てきたように、①小叢林略清規が、他の鎌倉唐音資料と異なり、澄母字をダ行音読みする頻度が高い理由については、その依拠した方音が同じ浙江北部でもこの甬江小片に属す寧波あたりのものに拠ったためと考えられないだろうか。なぜならば、上述のように、知・徹母と澄母の調音様式を異にするという現象が寧波を中心とした甬江小片の方言に存在するからである。その他の浙江北部音ではこうした現象は見出せない。こうしたことは、鎌倉唐音資料としての①小叢林略清規における特徴と共通するものともいえるであろう。

3. 処衢片における知組声母の破裂音読み

ところで、浙江南部の処衢片と称される吳方言地域では、知組が中古音より以前の上古音時代の破裂音でいまだ発音されている。ここでは、さらに処衢片の方言地点として、開化、常山、玉山の3地点における知組の状況を見てみる。

表5 処衢片における知組の破裂音字

開化	知母	猪tuo/tçyo、挂tuo、張帳tiā/tçiā、中ton/tçiong、竹tyo?/tçyo?、築ta?/tçyo?
	澄母	除die/dzy、苧die、長dē/dziā、著da?、蟲donj/dziong、
常山	知母	豬ta、挂tuo、朝tīwū、張長tiā/tçiā、帳tiā、椿tiō、桌tiā?、中ton/tson、竹ta?
	澄母	除die/dzy、苧die/də、沉dīŋ、塵donj、長丈dā/dziā、著da?、直de?/dze?、蟲dā/dzonj
玉山	知母	豬ta、挂tye、転tyē/tçyē、張tiā/tçiā、帳賬tiā、着te?、椿tiō、桌tiā?、摘te?、中ton/tçiong、竹te?/tçio?
	澄母	遲dēi/dzi、長dæ/dziā、著de?/dziā?、證tāe、擇da?/dzə?、蟲dā/dziong、

表中、多くの字は一つの漢字に二つの発音を有し、そのうちの一方が破裂音で発音されている。知組が、唐代末には章組と合流し始め、破擦音化し、その結果、今日の中国語諸方言のほとんどが章組と同音になっていることを考慮すると⁽¹⁶⁾、表5の浙江南部の状況は、非常に特異な現象であるということができる。だが、ここでは、本稿の主旨に沿ってさらに詳細に表5を見る必要がある。すなわち、澄母が知・徹母よりも破裂音で調音される傾向が強いか否かである。しかし、上表の状況をみる限り、特に澄母に限って破裂音声母が頻出するとい

音声学上、この濁音声母を発する時に破擦音化がやや抑制される何らかの要因が存在したと推察される。

2. 現代甬江小片における止摂澄母字

北部吳語の下位方言である甬江小片と称される寧波周辺の方言グループでは、中古止摂の澄母字において、澄母が知・徹母と異なって、その変化に遅れをとった痕跡を示す状況を見ることができる。ここでは、甬江小片の代表として、寧波a、鄞県、舟山の3つの地点を取り上げ、この3地点における止摂知組字の発音を表に掲げた。また、百年前の宣教師による寧波方言音を収録した字典『The Ningpo Syllabary』の状況についても、これを寧波bとして同時に記しておく。

表4 甬江小片における止摂知組字の発音

例字 地点	澄母字						知母字			徹母字			
	池	馳	遲	雉	持	痔	治	知	智	致	置	癡	恥
寧波a	dzi	dzi	dzi	dzi	dzi	dzi	dz̩	ts	ts	ts	ts	ts	ts
鄞県	dzi	dzi	dzi	dzi	dzi	dzi	dz̩	ts	ts	ts	ts	ts	ts
舟山	dzi	—	dzi	di ⁽¹²⁾	dz̩	dz̩	dz̩	ts	ts	ts	ts	ts	ts
寧波b ⁽¹³⁾	dzi	dzi	dzi	dzi	dzi	dzi	dʒy	tʃy	tʃy	tʃy	tʃy	tʃy	tʃy

上表より、澄母字の声母が舌面音で現れるのに対し、知・徹母字は舌先音で現れていることが分かる。一つの声母組が、音韻変化を起こす場合、同組内のすべての声母が同じ系列の調音様式に変わるのが一般的である。よって、本来ならば澄母も知・徹母と同様に変化して、声母は、/dz̩-/という音形を示すべきところである。しかし、そのようにならず、全体として舌先音に変化する前段階の、舌面音の状態にとどまっている⁽¹⁴⁾。寧波bの知・徹母字にあらわれる舌葉音は、甬江小片では舌先音であるため、これは、その前段階の状態(>ts)を示したものといえる。以上のことから、知組の変化発展の過程から判断すると、澄母が知・徹母よりも遅れをとっていたのではないかという推測がなされるわけである⁽¹⁵⁾。

は、資料としては大して役立たない⁽¹¹⁾」と述べておられるが、筆者は、鎌倉唐音資料では、表記上ジ・ズとヂ・ヅの区別はまだ消失しておらず、逆に中国語音の微妙な発音の差異を忠実に反映した結果ではないだろうかと評価する。つまり、中国語音において、澄母はその大部分は破擦音化しているものの、一部の字はまだ破裂音の状態であり、澄母は知組の中でも、知母や徹母と比べて破擦音化が若干遅れていたのではないだろうか。言い換えるならば、いまだ破擦音化 ($d > d_z$) への過渡的状況にあったのではなかろうかということである。

ちなみに、有坂1939のいうように、四つ仮名の合流による澄母のダ行音表記ということであれば、中古音における歯音グループ（章組・精組・莊組）の濁音声母にも当然ヂ・ヅが現れるであろうと予想されるわけである。しかし、①小叢林略清規を調べてみると、それは「充」ヂウ（穿母）、「静」ヂン／ジン（從母）、「淨」ヂン／ジン（從母）の3例を挙げるのみで、その内「充」字はもともと濁音声母ではないため、例外とみなすことができ、結局、2例のみということになる。一方、端組の濁音声母である定母では、ダ行音で表記されるのが原則である。このうち、ヂ(チ)・ヅ(ツ) が現れるものは以下のとおりである。

定母：同ヅン／ツン、動ヅン、途ヅ、図ヅ、提ヂ／チイ、弟チ、

定ヂン／チン、頭テウ／チヤウ／チヨウ

やはりヂ [di]・ヅ [du] は中国語音の定母 [d] を表記するために用いられ、[dзи、dʒи] [dzu] と破擦音化してはいなかった、と見る方が適當ではなかろうか。このことから、表3のように、澄母も個別字においては定母の発音に近いものがあったと推測されるわけである。

ところで、知・徹・澄母は一グルーブをなしており、音変化するときはともに並行した変化の過程をたどる。すなわち破裂音から破擦音へと変化する場合は、知・徹・澄母はすべて一律に変化するものである。しかしここでは、澄母の変化が若干遅れたのではないかということである。この遅れが何に起因するのかは、いまのところ究明できていないが、澄母と知・徹母との違いを考えると、前者が濁音声母であるのに対し、後者二つは清音声母である。このため、

に存在した破擦音・摩擦音の二系統を統合して、タ行音のチ/ti/・ツ/tu/、ヂ/di/・ヅ/du/よりは、原音に近い音と認識された、サ・ザ行音で代用し、表記されたということである。

1. 鎌倉唐音における澄母のカナ表記

さて、上述のような中国語音史ならびに、中国語音の「歯音」に対するカナ表記についての認識をもとに、鎌倉唐音資料の知組の音形を見てみると、知組の濁音声母である澄母は、原則表記であるザ・サ行音で表記されず、ダ・タ行音で写されるという例外的発音が散見される。そこで、下表のごとくその例外的表記例を掲げた。澄母所属の総字数と例外字数、ならびにその出現割合をカッコ内に示した。

表3 鎌倉唐音資料における澄母の例外的表記例

資料名	例字とそのカナ表記	例外字数	総字数
①小叢林略清規	除ヂ、厨ヂ/ヲ、住ヂ/シ、持ヂ/シ、塵ヂン/シン、長ヂヤウ/チャウ、場ヂヤウ/テウ、棹タク、幢ツン、值ヂ/シ	11(40%)	27(100%)
②諸回向清規式	持ヂ、塵ヂン	2(22%)	9(100%)
③金沢文庫本正法眼藏	杖ヂヤウ	1(16%)	6(100%)
④梵清本正法眼藏	綻ヂン、杖ヂヤウ、直ヂヨウ	3(37%)	8(100%)

②諸回向式清規や③金沢文庫本正法眼藏では、確かに澄母の表記は例外的扱いとすることができるが、①小叢林略清規や④梵清本正法眼藏では例外とはいえない確率でダ・タ行の音形が現れることが分かった。このような澄母のダ・タ行音表記は、他の知組字においても存在するが、僅少で、①小叢林略清規では、超(徹母)にチヤウ/テウ、③金沢文庫本正法眼藏では、珍チム、漲チヤウ(知母)があるだけである⁽¹⁰⁾。

ゆえに澄母に突出してダ行の音形が現れることについては、何らかの理由があったのではないかと考えられる。有坂1939では①小叢林略清規に現れるこの音韻現象に関して、「濁音(澄母)の場合には、江戸時代にはジ・ズとヂ・ヅとの音韻上の区別が既に失われていたので、その時代に記録された諷経の唐音

保持するか、あるいは舌葉音を経由して舌先音[ts-]等に変じ現在にいたったと考えられる。

0. 2 鎌倉唐音における知章組のカナ表記

一方日本漢字音においては、鎌倉唐音よりも以前の呉音漢音では、中古音の知組はタ行音で、章組はサ行音で表記されることが常であり、両者は整然と区別されていた。ところが、鎌倉唐音では、知組は、章組や莊・精組と共に一律にサ行音で把握されている。これは、0.1で述べた知組の章組への合流という中国語音における声母の変化を反映した状態である。知組が章組をはじめとする歯音声母と同様に、サ行音で表記されることは、鎌倉唐音における字母表記の最大の特徴である。

表2 鎌倉唐音における舌音、歯音のカナ表記例

中古声母		例 字							原則表記
舌 音	端 組	チ	ツ / フ	チ	ツ / フ	チ	ツ / フ	チ	ツ / フ
	知 組	シ	ス	シ	ス	シ	ス	シ	ス
歯 音	章 組	シ	ス	ジ	シ	シ	シ	シ	シ
	莊 組	シ	ス	シ	ス	シ	ス	シ	シ
	精 組	シ	ス	シ	ス	シ	ス	シ	シ
サ・ザ行									

知組の章組への合流ということは、音声的には知組が破裂音から破擦音に変化したことである。では、なぜこれら変化した知組を含む歯音声母の破擦音を鎌倉唐音ではサ行音でカナ表記されたのであろうか。これは日本語の破擦音をめぐる問題、いわゆる四つ仮名の問題とも関連してくる。

これについては、当時の日本語には（あるいは、日本語の表記という観点から見ると）、まだ破擦音が確立していなかったことがあげられる。今日の日本語の立場で考えるならば、破擦音といえば、一般にタ・ダ行のチ/tʃi/・ツ/tsu/、ヂ/dʒi/・ヅ/dzu/の音が存在するため、これらを中国原音の破擦音に当てることが自然であるが、当時のチ/ti/・ツ/tu/・ヂ/di/・ヅ/du/の発音は、まだ破擦音ではなく、単純な破裂音であった。このため、中国語音ですで

みようとするものである。この研究推進の端緒として、本稿では、中古音の澄母の問題を取り上げる。すなわち、禅宗系唐音資料に現れる中古澄母のカナ音形に依拠して、当時の吳方音における澄母の音価を推定し、かつ中古音から現代音までの音価変遷をたどることを目的とする。

0. 1 中国語音史における知章組の変化

まず、議論の順序として、関係する中国語音史の説明を付け加えておく。澄母の音価の問題に関わるのは、「五音」のなかの舌音と歯音である。これは、中古音で5系統に整理された声母の分類によるもので、詳細は、以下のとくである。

表1 中古舌音、歯音の声母表

		清 音	清 音	濁 音	清 音	濁 音
		無氣音	有氣音			
舌 音	舌頭音一端組	端母	透母	定母		
	舌上音一知組	知母	徹母	澄母		
歯 音	歯頭音一精組	精母	清母	従母	心母	邪母
	正歯音一章組	章母	昌母	船母	書母	禪母
	歯上音一莊組	莊母	初母	崇母	生母	

知組は中古音時代には端組と並んで、舌音に属しており、両者の差というものは調音位置が端組よりも知組のほうがやや後方で、舌面破裂音であったということである。しかし、その後、知組は調音様式を変え、歯音の章組あるいは莊組と合流することになる。この知組の変化による章組あるいは莊組との合流は、邵栄芬1964、羅常培1933、高田時雄1988などに拠ると、10世紀頃までに遡りうるということである⁽⁵⁾。その後14世紀に著された『中原音韻』⁽⁶⁾（1324年）においては、知章組は合流して舌葉音の状態を示している⁽⁷⁾。それらはその後さらに巻舌音化して現在に至っている。

一方、吳方音史では、北部吳語（本稿では主として太湖片を指す⁽⁸⁾）においては、知組は章組と合流した後、その後は巻舌音化することなく⁽⁹⁾、舌面音を

宋末元初の北部呉語における 中古澄母の音価とその音価変遷

— 鎌倉唐音資料にあらわれる澄母のカナ音形に依拠して —

平田直子

0. はじめに

唐音とは、呉音漢音に継ぐ日本漢字音の一層を形成するもので、移植時期によって異なる二つの語音系統を総称した名称である。一つは、鎌倉期移植の唐音、もう一つは、江戸期移植の唐音である⁽¹⁾。本稿で取り上げる唐音とは、前者の鎌倉期移植の語音体系で、以下、これを鎌倉唐音と呼ぶことにする。鎌倉唐音の字音資料としては、古臨済曹洞系唐音や泉涌寺相伝の字音（以下、禪宗系唐音と呼ぶ）⁽²⁾、詩作の際用いられた韻書『聚分韻略』諸本があるが、前者の禪宗系唐音資料に反映される語音体系については、有坂1939のいうように「古臨済曹洞系唐音の起原は鎌倉時代に在り、宋末元初の頃支那の浙江地方の寺々で行われていた諷経の音を伝えたもの」であり、また後者の『聚分韻略』も、もともと臨済曹洞宗の寺院で頻用され、禪宗系唐音に準ずるものとされている⁽³⁾。ゆえに、およそ鎌倉唐音の中核部分は、宋末元初（1279年南宋滅亡）、大雜把には、13世紀の浙江音（浙江北部）に基づいて形成されたといわれている⁽⁴⁾。このため、中国語の呉方言の音韻史研究において、これら鎌倉唐音資料を利用することは非常に有用であるといえる。しかしながら、従来の研究では、資料それ自体の研究や日本語音韻史における位置づけなど、主に日本語学の側からのアプローチはなされてきたが、その母胎となった中国原音、つまり宋末元初頃の呉方言（浙江音）との関係という面では、まだ十分な研究がなされないまま今日に至っている。そこで、筆者は中国語学の側からこの鎌倉唐音資料を利用し、その依拠したとされる呉方言の音韻との全面的な比較対照を通して、13世紀頃の呉方言系ならびにその語音体系の呉方言史上における位置づけを試